

平成27年度第4回 伊那市総合教育会議会議録

- ◎招集年月日 平成28年1月29日（金）
- ◎開催日時 平成28年2月8日（月） 午後3時30分～5時10分
- ◎場所 伊那市役所 庁議室
- ◎出席者 白鳥市長、松田教育委員長、宮脇教育委員長職務代理者、平澤教育委員、田畑教育委員
- ◎欠席者 なし
- ◎出席職員 北原教育長、大住教育次長、北野学校教育課長、小松生涯学習課長、捧文化振興課長、酒井スポーツ振興課長、森田高遠長谷教育振興課長、中村指導主事、唐木指導主事、山崎教育総務係長

1 開 会

大住教育次長

皆さん、こんにちは。定刻となりましたので、今年度第4回、最後となります伊那市総合教育会議を始めて参りたいと思います。なお、あらかじめ報道の皆さんにお願い申し上げますけれども、本日の協議事項(3)の「学力向上への取り組みについて」、(4)の「不登校について」、こちらにつきましては、一般公開していない数字等に基づきまして議論をさせていただきますので、この部分については非公開ということをお願いしたいと思います。それでは初めに白鳥市長からごあいさつをお願いします。

2 市長あいさつ

白鳥市長

みなさん、こんにちは。朝から雲ひとつない素晴らしい快晴の伊那の春に近い冬があります。実は今日、小浜市から農業関係の視察団が来ておまして、みなさん非常に驚かれています。こんなにすごい景色の中でみなさん暮らしているのかということで、今日、羽広荘にお泊りということなので、「夕方、南アルプスにあたる夕日を見ながら、一杯飲んでもらうともっと素晴らしいですよ。」と申しあげました。こうした環境の中で暮らしているとどうしても見逃がしがちなことがあるわけですが、そうしたことにお互い気がついたら子どもたちに伝えていくことをこつこつ続けていくことが私たちに与えられたひとつの使命かなあと思うわけであります。先生方も春が近づいて福寿草が咲いたとか、あるいは梅が一輪ほころんだとか、そうしたことひとつにしても地域に寄せる子どもたちの郷土愛が必ず深くなっていくと思いますので、是非そうしたことにつきましても教育委員のみなさん一緒になって取り組みをしてもらえればと思うわけであります。伊那市は子育て日本一ということで、2年連続評価をされました。また、移住定住の中でも移住をしたい都市として山梨、長野地域で一番ということで、非常に今までの取り組みが注目され、また、数字として表れていると思うわけであります。また、そうしたことだけでなく、ここに住んでいる私たちもそうしたことに對して少し自覚が生まれてきているのかなあという気もいたします。新聞報道のおかげもあります。また、職員の話、みなさんのお話の中で「こんな素敵なおところはなほないよ。」と言うような話がいろんところで聞かれるようになってきた。そういう結果がこういうところにつながってきているのではないかと

うに思うわけでありませう。私たちらは教育に関わるものとして「暮らしのなかの食」を始めております。これは明らかに日本の教育の中でも注目、特筆されるべきことであらうと思ひますので、この「暮らしのなかの食」を地道に着実に増やしていきたいというふうに思ひます。また、先日の伊那小学校の総合学習、ちょうど、立教大学の前田先生という方がお見えになっておりまして、その方が前々から伊那小学校に注目し、また、学生を連れて参加されたということで、可能であれば終わってから市長と懇談できないかということがありまして、夜、話をしました。非常に驚かれていました。教育に関わる先生であります、たまたま野球部の部長をやっているということで、今年のは秋は神宮へ行こうという話までしまして、大住次長にも一緒に出てもらいましたが、いろいろなつながりの中で広がっていくということ、それも、子どもたちにも学校で教わっていることだけじゃなくて、社会にも、また、いろんなところにも学ぶ場はあるわけでありませうので、生涯にわたって勉強ができるような、そんな環境づくりを是非ともお願いしたいと思ひます。今年のは3月末をもって合併10年ということになります。伊那市としては合併10年の年の前と後を含めていろんな合併に関わる冠事業であるとか、様々な取り組みをしようということをやっておりますので、教育の関係においても合併10年ということで、今、いろんな企画がされております。中村不折150年とか、東京藝術大学が高遠を経過して伊那に来てから30年になるわけですね。いろいろなことありますけれど、そんなことも、子どもたちにはなんでそうなのかということを含めて教えてもらいたいと思ひます。今日の会議、5時までということであまり時間がないわけでありませうが、内容濃く議論をしていきたいと思ひますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

大住教育次長

ありがとうございます。続きまして、松田教育委員長、お願ひいたします。

3 教育委員長あいさつ

松田教育委員長

私の方からふたつお話をさせていただきたいと思ひますけど、今、市長さんの方からお話がありましたように6日の土曜日に第37回の公開研究会が行われました。北は青森、岩手、南は沖縄から参加されまして、来賓等を含めれば、900人を超えるみなさんが参集してくださいました。ある時、本多校長先生から「学級数が半減してしまつた。先生方の負担が大変になるので、連合で、1、2年でひとつ、3、4年でひとつというような形で公開をしていきたいが。」という相談がありましたので、「先生方に諮ってみたら」という話をしました。そうしたら先生方が猛反発をして、「とんでもない。」と「学年は学年できちつとやりたい。」というふうに言われました。そういう想いで参加させていただきましたが、私がお世話になっている時には、倍の6学級ありましたが、その時と変わらない遜色ない素晴らしい研究会でありました。前向きに真摯に取り組んでいる先生方を心から支援していく、そういう教育行政に努めていきたいということを研究会を通して改めて思ひました。ふたつ目ですけれど、日曜日に第10回農村歌舞伎祭が県民文化会館で行われました。ご覧になった方もおられると思ひますけれど、最後に中尾歌舞伎が演じたんですけれど、役者さんが緊張したのか、途中でセリフが詰まってしまつたんですね。そうしたらどういふことが起こつたと思ひますか。励ましの拍手、そしてそのうちにおひねりがバンバン飛ぶ

んですよ。感動的な場面でした。そして役者さんはそこで立ち直り最後まできちんと演じ切りました。幕が一回閉じてまた幕が開いて、中村さんが最後のあいさつ、万来の拍手でした。それを見ていまして、内山節先生が「お医者さんにかかるいのちは漢字の命、しかしそういう場面で皆さんが見せる姿がひらがなのいのち」というふうに教えていますけれど、ひらがなの「いのち」が脈々と生きている。井上井月が30年近くここに暮らしたのも、そういうことに支えられていると思うんですけど、そういうひらがなの「いのち」を育む教育に力を尽していきたいとそういうふうに思いました。よろしく願いいたします。

大住教育次長

ありがとうございました。それでは続いて協議事項に入りますが、以降の進行は市長の方でお願いいたします。

4 協議事項

(1) ICT教育について

白鳥市長

それでは早速ですが、4項目、その他を入れると5項目になりますので、ひとつあたり15分くらいでしょうか。長い短いはあると思いますが、目安としてはそのくらいでしょうか。まず、最初に「ICT教育について」を議題といたします。最近国の方でも盛んにICT教育ということをおっしゃっています。それはそれでいいわけですが、画一的なICT教育ではなくて、地方は地方の事情があって都会は都会の事情があるわけですので、そういうことを上手に導入時に検討してもらいたいなあというのが正直な気持ちであります。昨年、長谷中学校と東部中学校でICTを使った教育をやりました。非常にいい成果が出たわけですが、今年はそれを受けながら小規模校の小学校にも展開したいということでもあります。私が前から言っているのは、文部科学省は車を使っての通学時間1時間圏内であれば統合しろというようなことを発信しているわけですが、小学校なり中学校なりの存在というのは、その地域にとってみると本当によすがであって、希望の光であるので、そうしたことを軽々に、議論をなくして合理的と言いますか、バツサリと廃止をしていくということはあってはならないと思っています。そうした時に物理的にどうやってカバーするかということが課題になりますけれど、私はまさにこのICTっていうのはその部分で出てきたものであると捉えておりますので、こうして地域が少子高齢化になって云々という、そういうフレーズはどうでもいいと思っています。それよりも小規模校であっても同じような教育の機会が与えられる、そのツールとしてICTがある。そうあるべきと思っていますので、そういうことで今年ICT元年といいますか、2年目になるんですけど、担当の方から説明をお願いしたいと思います。

北野学校教育課長

時間も限られておりますので、手短にお話しさせていただきます。資料の1、右肩に番号をふってございます。こちら、今年度受託しました「少子化人口減少に対応した活力ある学校教育推進事業」として文科省から200万円の委託金をいただいて実施してきているものです。研究タイトルとして「小規模校におけるデジタル教材の開発・活用と学校間ネットワークの構築による教育活動の高度化」ということでござい

ます。大きく2つございまして、(1)として、小規模校のメリットを最大化させる方策、また、(2)としまして、本年度特に力を入れて取り組んできました小規模校のデメリットを最小化させる方策、これは学校間ネットワークの構築ということで、合同授業を通じまして、小規模校の生徒の社会性を涵養する機会及び多様な意見に触れる機会を確保してきたものでございます。平成27年度の実施内容につきまして、今、市長の方からもありました長谷中と東部中を実証校といたしまして、授業の場面でICTを活用し実施してまいりました。特に2ページ(ウ)理科「エジソン電球をつくろう」ということで、公開授業ということで長谷中、東部中で実施したものです。少し飛びまして(5)効果の測定ですが、有識者ということで東京工業大学の清水名誉教授にお願いしまして、アンケートの実施、また、客観テスト、客観テストにつきましては印刷教材とICT教材を使ったクラスで実施したものでございますが、結論から申しますと、アンダーラインで示されている「効果ありの検証結果が示された。」ものでございます。この分析につきましては学習意欲の向上でありますとか、授業の分かりやすさがあったというふうに分析されているところでございます。しかしながら、(6)取り組みに係る課題等で、遠隔授業が臨場感がなかなか良いものにならない、低いということ。そして、日常的にできる環境づくり。今回は言ってみれば準備に多くの時間がかかったりしまして、負担も大きかったわけですので、このあたりが日常的にできる環境づくりを目指したいということで、特に学校間の調整になってきますので、合同授業を行う際、年歴等の相談もしていく必要があるということで、来年度以降に結び付けていきたいものでございます。3ページ「3 平成28年度の実施計画」でございますが、継続で2中学校、新規で4小学校、小規模校を実証校としまして、中学校におきましては、今年度の取り組みを継続することになりますが、特に、小規模校のメリットである個の指導が行いやすいという点にも着目しまして、ICTを活用した家庭学習の取り組みについても研究を進めるものでございます。小学校におきましても遠隔授業を中心として、総合的な学習、行事、音楽等の交流授業も視野に入れていくものでございます。雑駁でしたが現在のICTへの取り組み、資料としてはこの11月に行いました遠隔授業のパンフレットをお付けしてございます。また、内部資料ということで、カラー刷りのもの、こちら地方創生に係る施策ということで、右下の方にIoT推進協議会の組織化というような表示がありますが、この中にも遠隔教育、超臨場型コミュニケーションの確立とありますが、こういったIoTの枠組みの中で、伊那市としてもこのIoTを進めていきたいと考えているところでございます。

白鳥市長

今の説明であります。このことについて、ご意見をいただきたいと思っております。ICT教育全般に対してのお考えとか、具体的に進めるうえでの注意点、到達点とか、それぞれ教育委員のみなさんを含めて、お話しをいただければと思っておりますがいかがでしょうか。

松田教育委員長

遠隔教育についてですけれども、長谷中学校と東部中学校が取り組んでいてくれますけど、先程市長さんの方からお話がありましたように「暮らしのなかの食」が教育委員会の重要な取り組みですけれども、ここに視点を当てて、東部中学が長谷中学の近くの畑と一緒に耕作して、そしてその耕作した後の様子を長谷中学校から東部中学

校に送るといような感じで使えると、こう、トピック的に行うのではなくて、一年間、日常化、生活化するっていうんですか、そういうつながりになっていって、非常に濃い遠隔教育ができるんじゃないかと思いますので、そういう取り組みに力を入れていったらどうかと思います。

白鳥市長

まず、始める前にお互いの共通の項目を、顔を合わせたり、実際に作業をしたりしたその先に遠隔教育というものがあつた方がいいということですね。ほかにどうでしょうか。

北原教育長

ふたつありますけれど、今の日常化では、ここには出てきていないんですが、例えばデジタル教材を取ってみると、東部中学校では既に学校の横の断層を撮つてこれを教材化しているんですね。これがまた、同時にはならないんですが、長谷に行くと共に学び合える教材をいくつも持っていますので、今年は映像だったんですが、これから両校で研究を進めていく中で、そういうことで学び合うということがひとつあるかなあということと、合わせて、「少子化人口減少に対応した活力ある」というタイトルでやっているんですけれども、第1回の会の時に東部中の校長先生が「いや、長谷中ばかりメリットがあつたって困る。」と、「そうじゃないんだ。俺ら教材研究をしていて、既にメリットがあるんだ。」と「双方にメリットがなければ、この事業は進まないよ。」と言って、その通りだなあと思いますので、やはりお互いに得るものがあるという観点で、進めていくことが大事かなあと思います。もう一点は、やはりすでに始まっていることですが、新山小学校と手良小学校では、ICTではなくて人が行き来するところで交換を始めておりますので、これを実際に使いながら日常化していくことができればいいなあと思うんですが、ただ、その際2ページにありますように、とにかく準備が大変ということと、まだ現在使っている機器では1対1とか、こういうようなことができなくて、若干時間のロスがある、そんなことを今後、検討していければいいかなあと思います。

白鳥市長

ほかどうでしょうか。

田畑教育委員

遠隔でつなぐということで、学校間のネットワークを構築していくというのはすごくいいなあと考えていまして、あとは、準備の手間の部分がどれだけ省力化できるかということと、つながりを深めるというのが非常に大きいテーマなんじゃないかなあと思います。ここでは理科の授業が取り上げられていますが、もっといろんな形の活用方法があつて、先生によつても授業の中にどれだけデジタル機器を入れ込むかというのは、それぞれの先生の力量に掛かってくるので、先程断層の話も出ましたけれど、学校の特色、教育資材があるんですが、それが校内だけで終わつていて、それをデジタル化することで、市内のネットワークがつながつた時に、それぞれの先生方がある先生の作つたデジタル教材を「俺も使つてみたい。」という電子教材ライブラリーのような形でネットワーク化できるというのも大きなメリットになっていくんじゃないかという気がしまして、つなぐというネットワークもひとつなんですが、お金のなか

る話なんであれなんですけど、教員の先生たちがもっと自由に i P a d を中心とした機器に触れられるような機会を、年度を渡って毎年毎年レベルアップしていってもらえるような取り組みも必要になってくるのかという気もします。

白鳥市長

これ、あれですかね。ICT教育の一番の目的は小規模校と大規模校とか、小規模校同士とか、一番の目的はどこにあるんですか。

北野学校教育課長

この事業に関してということでしょうか。

白鳥市長

ええ。

北野学校教育課長

この文科省の事業の目的に関しましては、先ほど申しましたように小規模校のメリットを最大化させる、小規模校のデメリットを最小化させる方策を研究していきましようということ、それをもって活力ある学校教育の推進を図りたいと基本的にはそういうことかと思えます。

白鳥市長

私が最初にこれを見た時に、小規模校には音楽の先生がいないとか理科の先生がいないとか、算数の先生も少ないとか、そうした時にこうしたICTを使って、授業でなかなか習熟できていない部分を、行ったりやったりすることが一番の目的かと思ったんですけど、今の話では、小規模校のメリットの最大化とデメリットの最小化という同じことをひっくり返したようなことなただけれど、伊那市としては、本当はどこに求めるのかということを実際に議論していかないといけないんじゃないですかね。授業の内容のことがひとつあり、教材を作っていくましようっていうことがあったり、子どもたちもこのICTの機器を含めて、先端のものに習熟していくということもあるだろうし、そこのところが具体的に明確化されたうえで、踏み込んでいくことがいような気がするんです。

松田教育委員長

二つに焦点化していった方がいいと思うんですけど、ひとつは遠隔で、長谷中と東部中を、核になる、例えば「暮らしのなかの食」でつなぐことによって、つながりを日常化していく。トピック的だね、高まりが少ないので。それがひとつだと思うんです。もうひとつは、アクティブラーニングを行っていくことが大事だと思うんです。ということは、東部中でできる学習教材と長谷中学校でできる学習教材の間には人数が違うので、開きがあるし、多様性が出てくると思うんですけど、大規模校でできた学習教材を長谷中学校で使うとか、あるいは春富中学校で使うとか、そうした学習教材を交換し合うっていうことが、やる方法としてはかなり楽に、順調にできるのではないかと思います。授業を同時に仕組んでいくということになると、カリキュラムを作っていくなければいけないとか、担任の先生同士の考え方が違うので、それをつじつま合わせをしていくのにうんと時間がかかってしまうんですけど、学習教材の

交換ならば安易にできるんじゃないかと思うんです。取り組みとしては。

白鳥市長

最初から、一気に100%目的が達成できるわけではないので、今言ったようにネットワークを上手に使うことに慣れるように、例えば「暮らしのなかの食」に使いつつ、次は教材を作り、交換しつつというようなステップで、それぞれ足りない授業については、お互い教えたり教えられたりということで、そんな感じなのかなあと思います。

北原教育長

そういうことを含めて、本年度の場合には、最初の機器の使い方のところからありましたけれども、今度、新規に入ってくる小規模校をそれぞれつなぐところでは、学校ごとに十分つないでいただいたうえで、非常に優れた授業力を持った先生方がいますので、あまり欲張らないで、ここはこの教科とこの教科についてやろうねとかいう形で学び合う。子どもたちも学び合うんですが、先生方もお互い学び合うことで指導力をうんとアップすることができると思うんです。そのためには事前の打合せっていうことが大事なんですけど、この4つの小学校ではお互い交換し合うことで、「じゃあ、あまり欲張らないで、この授業でお互い学び合しましょう。」と、双方向でも学んでいるんですけど、校内でも学び合って、アクティブで子どもたちが力をつけていくにはどうしたらよいかというところに焦点を持っていけるかなあと、それが2年目の大きな狙いになってくるかと思えます。

白鳥市長

ほかどうでしょうか。今、方向としてはなんとなく見えてきたような気がしますので、一気に欲張ってエンジン全開ではなくて、1年目、2年目、3年目というふうに段々に上がっていくと、ただ、課題のひとつとしてもう少し大きく出していいと思うのは、指導者の育成ですよ。そこのところがポイントになると、東部中にいる足助先生のような人がどこにでもいればいいんだけどそうじゃないので、小規模校になればなるほどそういう先生が少ないので、そこをどういうふうにカバーしていくかが課題だと思うので、それについて教育委員会でも考えてもらいたいのと、あと、機器がどんどん進化して来るので、あと10年後iPadはないと思うんだよね。それだけに振り回されてしまうとまずいかなあとと思う。どういうふうにも変わっても対応できるように、教育の基本は対面であったりとか皮膚感覚の部分があるべきだと思うので、今の状態が10年後にあるということをこのICTの中では考えていかない方がいいと思う。

松田教育委員長

要望ですが、今、音楽の時間には音楽室に行ったらすぐ音楽の授業が始まる。理科の時間には理科室に行ったらすぐ理科の授業が始まると、そういうふうにこの教育機器もこの教室に行けば、いろいろ準備しないですぐ授業に入れるという是非予算をつけて、段々に設備を整えていって欲しいと思う。先生方も強く要望しているので是非お願いしたいと思います。

白鳥市長

それは準備する人がいるっていうことなんですか。

松田教育委員長

準備する人もいるけれど、そういう教室が欲しいということです。

白鳥市長

それは先生たちに工夫してもらえばできるんじゃないですか。

松田教育委員長

それはそうですけれど、そこへ備え付ける機器も必要になってくる。

白鳥市長

例えば伊那小であればかつての児童数よりかなり減っているのでも、教室が空いているはずですよ。そういうところは自分たちで、物置的に使っているのであれば、どちらかに寄せてそこを使って、必要最小限のものはこれだと提案がないとだめだよ。

松田教育委員長

また、具体的な提案を学校からさせていただきますので、お願いします。

白鳥市長

それは、内容をよく見て決めていきたいと思います。では、この件については一旦終了にしますが、この検討シートですけど、企画の方でまとめて伊那市、伊那谷の将来的な姿を作っています。教育関係の遠隔授業もありますけれど、新しいエネルギーの設置であるとか、また、医療関係の見直しであるとか様々なものが入っておりますので、さらっと書いてはありますが、中身の深いものになっておりますので、またご覧いただきたいと思います。特にIoTについても市を上げて取り組むということでその準備をしておりますので、その中にも遠隔教育ほかが入っています。では、続きまして(2)の郷土学習副読本「わたしたちの伊那市」作成について、合併して10年、南アルプスが国立公園に指定されて50年とか、ユネスコエコパーク・ジオパーク、その時に10センチメートルの小さなスケールを作って、南アルプスの山々の名前と標高が入ったものを作って子どもたちに渡したんですが、これが非常に好評です。どこへ持っていっても欲しいという話があるんですが、ここに住んでいて知っているか知らないかによって、人に会ったときとか全然違うんですね。自分の地域のことを話をするにしても、話している人がかわいそうになっちゃうと思うほど、やはり知っていることが大事だと思うので、そのためには自分の住んでいるところがどんなところなのかということで、これを準備してもらっています。これを全部覚える必要はないと思うんですね。子どもたちが興味のあるところだけでいいので、あるいは先生たちが読んでここが大事だと思うところを話をすればいいし、これは副読本ですので導入部分でそんなことができればいいなということで準備をもらっています。このことについて説明してください。

(2) 郷土学習副読本「わたしたちの伊那市」について

北野学校教育課長

資料2郷土学習副読本ですが、あくまでも仮称でございますが、伊那市郷土学習副読本「わたしたちの伊那市」作成についてでございます。趣旨としては、ふるさとに思いを寄せ、地域に学び、地域を誇り、地域に生きる子どもたちの育成を行うためにこの資料集によりまして、深い郷土学習への手がかりとして活用していきたいというものです。作成期間は2年間、今年度から取り掛かっております。原案作成から後ほど説明させていただきますが、ざくっとしたものでございますが、目次建て等が進んでいます。来年度、加除修正、最終的な編集を行いまして製本したいというものでございます。この編集委員会の組織でございますが、長谷中学校の高木校長先生を委員長としまして、ご覧の先生方にお手伝いいただいております。この中で、平成27年度3月まで含めまして4回の委員会を開催しまして、夏休みを中心に先生方積極的に取材等行ってきていただいております。4番目の内容案でございますが、伊那市の自然、公共施設、産業、観光、歴史と文化など、このあと、内容についてお話をさせていただきます。小学校3～4年生の教科書を基本にしなが、5～6年生、中学校1年生へとつながる内容、こういったものを考えております。27、28で作成、29年度から学校において使用できるよう進めたいというものでございます。裏面をご覧くださいますと、あくまでも今の段階での案ということで、目次建てしてあるものでございます。伊那市の様子、身近な暮らし、人々の暮らしと畑の仕事等々ございまして、最後の11の郷土の歴史、また、伊那市の人と文化財というようなもので肉付けをしていきたいというものでございます。本日、委員のみなさんには、厚めの冊子をお配りをしてあります。まだ、体裁を整えてありません。各先生方から現在の状況ということで出てきているものでございます。この際、今後の編集に活かすべく、ご提案、補足をいただきたく、ご協議をお願いするものでございます。

白鳥市長

このことにつきまして、これを見ると、項目ごとに小学校3年から中学校1年まで、全般用とか、職員学校用とか、これ、全部同じ内容ってということですか。相手によって中身を分けるってということですか。

北野学校教育課長

そうではなくて、一冊という考え方です。

白鳥市長

いろいろと細かいね。ごみの分け方まである。これ、途中で変わることもあるよね。その時はどうするの。

北野学校教育課長

はい、参考にした駒ヶ根市もそうなんです、改訂版を概ね3年から5年で作っていくことになると思います。

白鳥市長

数字的なものとか、何年かすると明らかに変わるところってあるよね。そういうものはリーフレットのように差し込んでいくと、5年に一度大規模な作業をしなくても、毎年毎年差し込み分を変えていくこともありなのかなあとと思います。

松田教育委員長

違う視点でよろしいですか。分担してやってもらっているのです、裏面の「伊那市の様子」から「伊那市の人と文化財」まで、ころんころんころんころんと上げてありますよね。やはり伊那市が連続的に、あるいは物語的に見えないと、伊那市の景色っていうのは見えてこない。その意味で表紙の裏のところに、覚えておきたいふるさとの山並みっていう南アルプスとか中央アルプスとか書いてある写真が出ているんですけど、もう少しこのところを工夫して見開きくらいの大きさにしていただいて、市役所を基点にして三峰川を仙丈まで遡っていく。その両側に特徴的なものを位置づけて、更に詳しくは何ページにありますよというように置いていくと、伊那市の景色が見えてくるよね。で、こちら側は天竜川を遡って、小沢川、小黒川を遡って駒ヶ岳、あるいは権兵衛峠ですかね、そこに中心的なものを位置づけていく。両方見ると伊那市っていうのはこういう景色かというのが見えてくると思います。そういうふう構成してやらないとせっかく作っても、ほかの資料集と同じような感じになってしまうので、もうちょっと工夫して出だしのところを大事にしていったらどうかなあとと思います。

白鳥市長

私もこの間見せてもらった時にそういう思いで、最初に伊那市の面積が出てきたあと、いきなり身近なくらしで身近にある公民館が出てくるんだけど、このつながりは何なんだろうと思ったんですね。

松田教育委員長

一人ひとり分担しているのです、こういうふうになってしまっているんだと思います。統一して、どういうところを伊那市として見せたいのかという構想がきちっとできていないので、こういうふうになっているんだと思います。景色が見えるようにしないといけない。

白鳥市長

全体のストーリーをもっと考えていかないと、それをやるのが教育委員会の仕事だと思うんだよね。先生方は先生方で調査研究をしてまとめて、これは印刷してホチキスで止めただけだと思うんだけど、全体で、これは何のために作っているのか、どういうところから覚えて欲しいのかっていうことと、ジャンル別でやったり大きなくくりで分けてみるとかね。中にはいらなかなっていうところもあるんですね。そこら辺をページ数を減らしてもいいのでスリム化していくと、特に小学校3年生から中学校1年生までっていうと幅が広過ぎちゃうと思うんだよ。その辺ほどの学年に一番知ってほしいのかということ議論すべきだと思う。ほかどうでしょうか。

田畑教育委員

これはあくまで副読本なので、情報提供ということで、委員長おっしゃたようにイメージを結び付けていけばいいと思うんですが、正直、使う先生がよく分かっていないまま使うことが圧倒的に多くなると思うので、実際この教材の中から何を拾ってもらって、何を子どもたちに伝えていくのかという使い方のガイド、狙いがなくて作っただけで終わってしまう。あえて入れてないのかもしれませんが、人口の推移が載っていないように思います。それから最後にお祭りが3つぽろぽろと載っていますけど、そもそもこの地域の人にとって、お祭りはどんな意味があって大事にして関わっ

てきているのかということ、この地域は農業中心で文化も含めて通って来ているので、そういうものをお祭りっていうのは今も継承されてきて、小学校3年生のみなさんもやがて大人になってこの地域を継承していくんだよということを授業の中でどんなふうに先生に取り扱ってもらうのか、郷土について学んでどう活かしていくのか、教科書だけではなくて先ほど市長もおっしゃいましたけど、使う先生方へのマニュアルも今後必要になってくるのかなあとと思います。あと、ストーリーという意味で言えばこういう歴史があって今につながってくるということが体系的に読み取れなくて、なんか過去と現在と未来が行ったり来たりしているところも読みづらさのひとつかなあとと思うので、そんな体系も考えていただければいいのかなあと思いました。

白鳥市長

そういう議論はなかったんですか。全部任せきりだったの。

北野学校教育課長

今の段階ではまず項目を決めまして、各先生に原稿を出していただいた段階ですので、これを基におっしゃられたストーリーに組み込んでいくのはこれからになります。

白鳥市長

これ、一番大事なところだと思うので、大至急議論した方がいいんじゃないかと思えます。小学生3年生から中学生までというのは広いと思うので、例えばジャンルとして自然だとか産業だとか、あるいは、歴史だとかローカルだとか一般的にはそうしたものが出てくるよね。自然であれば災害の歴史もあるし、エネルギーについて伊那市ではバイオマスや水力でこんなことをやっていますとか、あるいは、自然保護の話題も出てくるかも知れないね。エコパーク、ジオパークも出てくるだろうし、そういう分け方をしていく方が分かりやすいのかなと思うし、産業であれば農業とか林業とか、あるいは、観光業、製造業にはこんな歴史がありますよ。「伊那谷に太陽を」というのも大事な部分なので、そういう歴史があって、農業と工業を両方できるような歴史にしてきた。そうした先人がいて、今、こういう発達をしますよと、そういうことを知ってもらうことが大事じゃないかと思うけどね。45ページ、燃やせるゴミと燃やせないごみの分別の仕方とか、こちら辺は別の資料でいいと思うね。実際子どもたちに読んで欲しいページと、資料として先生たちが持っている部分を分けるとかいう方が子どもたちに伝わると思う。全部覚えろというものではないので、私たちが住んでいるこの地域は、こうした場所ですよと、ストーリー性を持って、系統立てて理解していく。その時にごみの分別だとか、消防署の仕事とかこういったところはごく普通に分かっているものなので、特に入れていかななくてもいいのかなと思う。ちょっとそこら辺の議論をもう一度してみてもいいんじゃないのかなあ。

松田教育委員長

ここまで資料ができていますので、これをどういうふうに組み立てていくか、構成するのかということをもっと議論すれば今、出てきたようなものになっていくと思います。「農業を訪ねれば」というような項目があってもいい。「歴史を訪ねれば」というような項目になっていくと分かりやすくなっていくよね。せっかくここまでできているので、これをうまく活用すればいいと思います。

白鳥市長

一番知ってもらいたい学年はどこになるんですかね。

松田教育委員長

郷土学習なので、3、4年ですかね。

白鳥市長

3、4年の子どもたちによく伝わるようなものだけチョイスして文章表現も平易にしてやっていくっていう方がいいかもしれない。

松田教育委員長

3、4年生用に作っても、意外と郷土に関する資料っていうのは中学生でも興味を持ってみられるんです。ふるさとですから。

白鳥市長

この中で、日本一のコーナーとかね、そういうものがあれば、アルストロメリア日本一とか、分水嶺を越えた水は日本にほかにありませんとか、木曾山用水の話とか、そこから見る南アルプス100キロに渡って見られる場所は伊那市以外にありませんとかね、日本一みたいなものをピックアップしてみると子どもたちの中では、記憶に残っていくかもしれない。どうぞ、いろんな意見を出してみてください。このままでまとめてしまうと心配な気がするのです。

田畑教育委員

年表をつけたらどうですか。人物のところは。

松田教育委員長

年表もいいよね。

白鳥市長

ここに、不折だとか伊澤修二だとか出てくるんだけど、この前も話したんだけど、それ以外にも芝田だとか微笑だとか他にもいっぱいいるので、この資料で知っているぞというものをに入れて欲しいと思うんですよ。日本中知っているような人たちじゃなくて、自分たちの先人でこんな皆さんがいたよということを知ってもらおう。ちょっと担当に話してみるじゃん、対象が総花的になっているので、絞り込むのと、そうなると中に掲載するものもどういふものが必要なのか、流れとしてはどういふふうにしていくのか、それを一回議論したうえで、これだけでできているので、あと、分けるだけ、加除、添削してね。ほかどうでしょうかね。

宮脇教育委員長職務代理者

今までも出ていますが、地図みたいなものがあって、伊那市のここが仲仙寺です。ここが何々です。そうすると自分たちが住んでいるところの近くを見ると、「ああ、ここにこんなものがあるんだ。」とか、「行ってみよう。」とかいふふうになるので、そうした地図的なものがあつたら分かりやすいかと思います。

白鳥市長

この地域はよそと違うぞというところをまず入れてもらうということですね。扇状地だとか、三峰川の河岸段丘なんか日本一だし、そういうものを入れていけば。活断層も結構研究されているし、秋葉街道だってひとつ面白いところだと思うよ。

6500年前、縄文中期から使われている道だとかね。そうしたことを知ったうえで今の道はどうなのとかね。

田畑教育委員

今うちの子は小学校2年生なので、コンセプトとしては、学校の授業で親と一緒に勉強するものはないんですね。市長おっしゃたんですけど、子どもが「今、実はこんなことを勉強しているんだ。」って親と開いて「じゃあ、日曜日に行ってみようか。」というような形でも使っていけるようなもの、親も子どもも教材を使っていけるようなもの、それこそ私、小学校4年の時に御子柴艶三郎の学習発表会をしたんですけど、自分の勉強した日本史の年表の中のどこにいたのかが紐づかなくて、小学校低学年で歴史って勉強の中に入ってこないだろうし、ざっくりの年表でいいので、それこそ黒船が来た時に伊那谷の穴の中に入って、明治維新の時もこつこつ掘っている人がいて、そのおかげでこの水が飲めているというような、ざっくりとしたものを親と一緒に確認できるようなものになれば使い方にも広がりが出るのかなと思います。

白鳥市長

どうでしょう。分解して組み直しと、資料編とそうでないものと、何を使いたいかということをもっと議論してもらって、ページはうんと少なくていいと思う。後から増やしていったいいので、これを子どもたちが読むかというとおそらく読まないと思うし。

平沢教育委員

市長さん言われるように、資料編っていうのはすごくいいと思います。何を教えたいかということで、もっと詳しく知りたければ資料編を見るっていうふうにしていけば、使いやすいし分かりやすい。いきなり公民館って出てくるとこの辺でつまづくんじゃないかと思いますね。

北原教育長

公民館で題を興しているのは、小学校3年生の教科書をイメージしていたと思うんですね。そういう意味で、身近な暮らしを学ぶことなんですが、一番は郷土の誇りとすごいなあとか行ってみたいなあとか、なぜこうなっているのか背景が分かるとか、そういうことが大事かなあとと思います。

平沢教育委員

身近な暮らしの中身が公民館というのはどうかなあとと思うんですが。公民館は文化施設ですよ。身近な暮らしのテーマと違うような気がする。

白鳥市長

その辺も一番の核心になるところから話をして進めていくようにしてください。続きまして、学力向上についてお願いしますが、ほかに(5)その他のところでやっち

やえれば。

全教育委員（なし）

（３）【非公開】学力向上への取り組みについて

（４）【非公開】不登校について

５ 閉 会

大住教育次長

活発なご意見、討論をありがとうございました。２７年度第４回ということで最後になりますけれど、引き続き２８年度もこういった機会を設けて参りますので、よろしく願いいたします。それでは以上で伊那市総合教育会議を閉じさせていただきます。ありがとうございました。